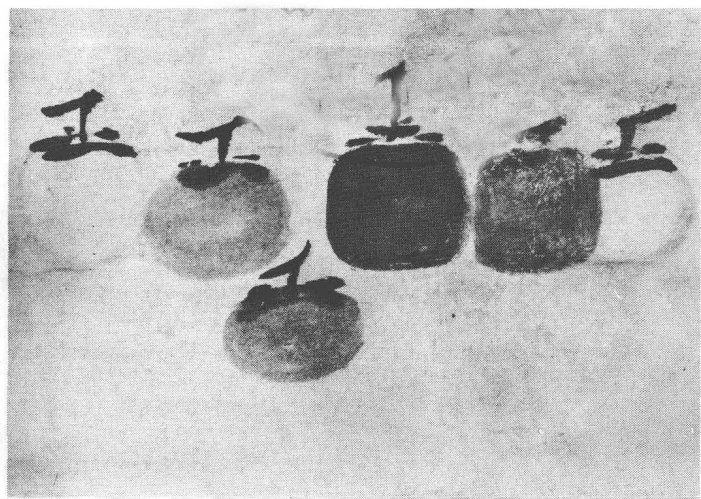


美しき隣人

人 葬

廣津和郎 著



宝文館版

美 し き 隣 人

昭和32年5月20日 第1刷発行

定価 300円

著 者

廣 津 和 郎

発行者

株 式 会 社 宝 文 館
(代表) 高 橋 長 夫

印刷者

早 坂 善 太 郎

三 恵 印 刷 ・ 大 光 堂 製 本

発行所

東京都千代田区神田錦町3-20

株 式 会 社 宝 文 館

振替東京280 電(29) 3019
8746

雪の翌日

一

聖夜

元

美しき隣人

叁

浮浪者と野良犬

二五

丘の上の別荘

二七

樹間の道

二七

小枝子とその母

二五

少年とブローチ

二五

雪の翌日

鷺見から小野町の小学校まで約四キロの道を、水野政代はいつかもう七年通い続けてしまつた。二十八歳であつた彼女が今は三十五歳になつてゐた。これは日本流の数え方で、近頃は満で数えるようになったから、三十三歳と何カ月という事になるが、併し年の数え方は違つても、何も実質的な年齢が違つたわけではない。毎日毎日が経つて行つた感じではそう長いとも思われなかつたが、扱て振返つて数えて見ると、われながらよく長い年月を飽きもせず辛抱して通いつづけたものだという氣になつて来る。

彼女がそこに通い出した頃は戦争中で、まだ国民学校と云われた時分であつたが、終戦後それが今の小学校と改められた。改められたと云えば、その頃は小野町も小野村と呼ばれてゐたが、終戦後、鷺見その他近隣の三カ村を合併して、今日の小野町の町制が布かれるようになったのである。

それだから彼女の住んでいる鷺見も今は小野町の一部になつてはいるが、その間の四キロの道は田圃と畑ばかりで、家一軒ないのである。

彼女はその畑と田圃の間を縫っている一本道を毎日自転車で行きつづけた。

彼女はS市で空襲に遭い、家を焼かれてこの鷺見に来たのであるが、住み馴れると此処が第二の故郷のような気持ちになつて来た。

特に風光明媚とは云えなくとも、この鷺見はおちついた部落であつた。西から北にかけてはS山とその続きの小山脈が、それも余り近く迫っているわけではなく、程よい距離を隔てて聳えていて、冬の寒風からこの土地を守り、その山々の裾がなだらかな傾斜をなして小さな高原地帯を形作り、山々からしほり出される清水を集めた鷺見川が、その高原地帯に幾曲りかの曲線を描いて、それが小高い台地であるこの鷺見部落の下を縫い、それから田畑の間を流れて三里程先の海にそそいでいるのである。

川幅は狭いが川底には山が近いために岩石が重なり、清冽な水がところどころに小さな滝やせせらぎを作っているこの鷺見川は、確かにこの部落におちついた纏まりを与えている一つの魅力であつた。

国道に近い小野の本町（新しく小野町の中心となつた昔の小野村は今こう呼ばれている）とは、一里の隔りとは思われない程、鷺見は人情醇朴であつた。

S市で空襲に遭つて、政代が母と子供の時脳膜炎に罹つたのが原因で一種の廃人のようにな

つてゐる兄とをつれて、避難の場所を求めて小野村に辿りついた時、そこの人達から彼女たちが受けたものは不人情そのものであつた。国道に沿つてゐるこの村は、S市あたりからの買出し部隊や闇のブローカーに擦れ切つていて、空襲に焼け出された彼女たちに、何か空襲を受けた事その事が彼女たちの日頃からの心掛けの悪さであるかのような説教めいた口を利いた。併し彼女たちが雨露を凌ごうとして求めている部屋一つ、物置一つ空けて呉れようとするものはなかつた。

「市の衆は日頃怠けているだで、そういう目に遭うだ」としよんほり立去ろうとする彼女たちの後から、追いかけて更にそんな風な皮肉を云い放つものもあつた。

その不人情や、冷淡さは、片田舎で広い世間を見ていないだけ、ひとりよがりであり、露骨であり、えげつないものであつた。都会に対する長い間の怨恨を霽らすのはこの時とばかり、何か復讐的な意地悪さであつた。

そこでその村から畑の間を、政代は母と兄とつれ立つて更に驚見まで行つて見たのである。何とかして住むところを探さなければならぬ事に必死となつていたが、併し小野村で受けた侮辱のために、何処か絶望的にもなつていた。四月なのでたとえ二日や三日野宿しても凍える心配はなかつた。併し五十五の母がもう不平を云う元氣もなさそうに黙々として畑道を歩いて

いる恰好を見ていると、彼女は泣きたいような気持になつて来た。

道の両側には菜畑と麦畑とが続き、うららかな空には、彼女たちの気持とは凡そそぐわないのんびりさで雲雀が囀つていた。

その畑道の尽きたところから、少し登りになり、それを登つたところに小さな橋が鷺見の部落の入口の門というような恰好になつていて、橋を渡ると部落に一步足を踏み入れる事になるのであつた。

家数六七十軒もあるであろうか、畑仕事のかたわら養蚕をやつてゐるこの部落は、トタン屋根が殆んどなく、草葺きの外は全部瓦屋根であるという事が、見るからに豊かな感じを与えた。

政代は橋を渡つたとつつきの百姓家に入つて行つて、恐る恐るこの辺に部屋を貸して呉れる家はないかと訊いたのである。小野村の冷淡さに絶望していた彼女は、此処でも好い返事が聞かれるとは殆んど予期していなかつた。

鶏に餌をやつてゐた四十五六のその主人は、無性髯を生やしているために何か可^こ恐^{おそ}い感じがしたが、

「お前さん等S市で焼け出されただね」と云つて振向いたその眼付は、案外やさしかつた。

「さようでございます。昨夜の空襲で焼け出されて、難儀いたしているものでございませう」と云いながら、政代は自分の声に慈悲を求める哀願の響きが出ているのが伝しかつた。

「そうかね、それはさぞお困りだろう。昨夜もあのB 29がえらく通るで、何処かやられているだ思っていたが、S市がやられただね。まあ、そこに腰かけなさるがええだ」

男は縁側の方を顎で指してそう云つた。そこで三人は真黒に古びた縁側に腰を下ろしたが、腰を下ろすと、もう立上るのが容易でない程疲れ切つていた。

その家の女房が抹茶を入れてくれたり、お握りを作つてくれたりした。

これは鈴木彦兵衛という百姓で、女房はお滝と云つたが、夫婦相談の後この家の本家の鈴木久兵衛の家の離れを政代親子に借りて呉れた。八畳に四畳半の離れは母家との間が廊下で繋がっていたが、縁側から直かに上れもするので、母家と関係なくそこで暮すことが出来るのであった。雨露を凌げればどんな処でも構わないと覚悟していた親子には、そんな部屋におちつけた事は思いも寄らない幸福であつた。S市で焼けた家というのは場末にあつた小さな家で、三室と云つても三畳二室に六畳一室の安普請だつたので、広い庭を前にしたこの鈴木久兵衛の離れの方が、そこよりもつと余裕があつてのびのびしていた。それに関東の大地震の時にもびくともしなかつたという事が主人の自慢であるこの建物は、真黒に煤けていても、柱が太くて

頼母しかつた。庭の真中に大きな防空壕が堀つてあり、その防空壕の向うには築山があり、その築山の下に樹立の蔭に立つている石燈籠が、防空壕の屋根の上にその頭だけ覗かせていた。

築山の横に若芽を吹いている何か名は解らない大木があり、その細かな網のように小枝の交錯した茂みで頬白が啼いていた。夕暮れの空は風もなく飴色に輝き、昨夜のS市の焼夷弾と火事との物凄い光景を思い出すと、ここは夢の世界のように平和であつた。

久兵衛は土地の有力者で、三年程前には村長をしていた事もあるというが、弟の彦兵衛同様深切で世話好きで、その後政代を小野の国民学校の先生として世話して呉れたのもこの久兵衛であつた。

政代はS市でも国民学校の先生をしていた。彼女は同市の女学校を出た。在学中には音楽に興味を持ち、声楽家として立ちたいなどという野心をひそかに胸に懷いた事もあつたが、同級に後に音楽学校に進み、ソプラノとして相当名を挙げた小此木寿々子がいいて、その頃から頭角をぬきんでいたので、彼女の声と自分の声とを比較すると、政代はあつさり自分の野心を捨ててしまつた。競争心とか嫉妬とかが欠除しているかのように、彼女は小此木寿々子を尊敬してしまい、寿々子が音楽学校に入つた時には、自分に代つて友達が入学したもののように心から喜んだ。その後寿々子と文通はなく、東京に出て行つて名を挙げている寿々子の方では、恐

らく政代の事など忘れてしまつたであらうのに、政代の方は時々寿々子の放送などがあると、朝から浮き浮きしてその時間を待つていたのであつた。

女学校卒業後間もなく父が死んだという事も、政代に東都遊学を断念させた理由の一つであつた。父はS市の目抜き繁華街に洋品店をやつていて、よそ目には盛大に見えたし、又家族の者も毎日の生活に困らなかつたままに、それ程経済的に行詰つてゐると思つてゐなかつたのが、父が死んで見ると、大きな店も白蟻が食い込んだ古建物のように、收拾のつかない程、その根本から行き詰つてゐた事が解つた。そこでその店を人手に渡した親子三人は、場末に小さな家をやつと手に入れ、政代は国民学校の先生をして母や廃人の兄を養わなければならなくなつたのであつた。

政代は平凡な顔をしてゐた。決して醜いという顔ではなかつたが、唯平凡で人に印象を残さない顔なのである。そしてその性質もその顔と同じように、總ての事に順応して行つて、その境遇をそう不幸とも思わないで生きて行けるのである。

S市で国民学校の教師をしている間に、彼女は一時文学が好きになつて行つた。彼女は東京で出てゐた或新人養成の雑誌に投書し、短い小説を載せて貰つた事があつた。彼女は筋道の立つた文章は書けたが、併しその容貌や性質と同じように、人に印象を残すような光つたものを

生み出す力はなかつた。短篇がその雑誌に載つた時には、丁度女学校時分に声楽に野心を持つたと同じように、文筆で立ちたいなどとひそかに思つたりしたが、いつかその野心も凋んで行つた。併し野心が凋んだと云つても、それがために悲観や絶望をするわけではなかつた。

二

その時その時の境遇に穩かに自然と順応して行けるような政代は、この鷺見から小野に通うのが少しも辛くはなかつた。

季節々々によつて、自転車を通つて行く道の風景にも変化がある。蓮華草の咲いていた田圃が掘り返されて、やがて鷺見川のセキが切られると、そこに青い空を移す水田が出来上り、間もなく田植えがあり、明るい緑の稲の穂が微風にそよいでいるかと思う中に、学校に会議などがあつて遅くなつた時など、たそがれの薄闇の中を源氏螢がすいすいと彼女の走つて行く自転車の前を横切り始める。秋には山が美しい。そして冬も冬で、南に近く海をひかえたこの土地は、S市の寒さに馴れた彼女には、殆んど寒さを感じない程空気がなごやかなのである。

戦争が終り、それが敗戦ときまつてからは、いろいろの変化があつた。村が町になり、国民

学校が小学校となるにつれて、校長先生も変り、他の先生達にも移動があつた。併し政代には変化がなかつた。

こうした片田舎の小学校でも、先生の間には勢力争いがあり、閥が出来たり党派が出来たりして、互に政治的暗闘が絶えず、そこに又外部の有力者達からの影響があつたり、県の役人からの干渉があつたりして、随分紛糾を極めるものであるが、政代はそういう出来事からいつも離れていた。彼女はその容貌と同じように目立つた存在にならなかつた。野心を持つていない彼女は誰にも憎まれなかつた代り、誰も彼女を仲間に入れて一勢力としようというような「重み」を彼女に感じていなかつた。

七年の間には勢力を持つたり、又勢力を失つたり、人を倒したものが又人に倒されたり、そういう動きがいろいろあり、多くの先生が移動したため、いつか彼女はこの学校として最古参の先生の一人になつてしまつていた。

併し彼女は自分より後から入つて来た人達に向つて一向先輩ぶらなかつた。そのために彼女の学校に於ける存在はいつになつても同じで、重きを置かれない親しみに誰からも悪く云われなかつた。

彼女は唱歌を教える時間が最も好きであつた。それは女学校時分に声楽家を志した名残りで

あるが、学校に儀式のあつた場合など、彼女の声樂はその余興のプログラムの中にいつも組込まれていた。彼女は声を張り上げて「オー・ソレ・ミヨ」を歌つた。

国民学校時分の教育法と小学校になつてからの教育法とは随分変化があつた。彼女はそれに素直に順応して行つた。

近頃入つて来た女の先生の友部よし子は、まだ二十二三の明るい先生であつたが、ダンスが上手で、放課後など若い男の先生達にもその手ほどこきなどしていたが、生徒達にも校庭でスクエヤ・ダンスを教えるのが得意であつた。

「友部先生、わたしにも教えて頂戴」

政代は校庭に立つて、それを見ていたが、そう云つてその生徒達の踊つてゐる環の中に入つた。彼女は自分でも受持の五年生の生徒達にそれを教えようと思つたのである。

彼女は青空の下で受持の生徒達にスクエヤ・ダンスをやらせながら、自分がオルガンを奏く事を考えると、楽しくてならなかつた。

そんな事で政代は友部よし子と仲よくなつて行つた。友部よし子は政代の声樂に対して流行歌が得意であつた。

「わたしS市でのど自慢に出た事があるのよ」とよし子は笑うと眼がなくなるようなその円顔